前口上

「アフター・スクール」の学び

中間 真一
HRI主席研究員

わざわざ「アフター・スクール」などと言わなくても、「放課後」と日本語で言えば良いではないか？ 本号表紙のテーマを見て、そう思われた方も多かろう。また、わざわざ「アフター・スクール」と言うということは、何かをたくらんでいるに違いないと勘ぐった方も少なくないだろう。さらに、なぜ大人は子どもたちの放課後まで〈学び〉で覆いたがるのかと感じた方もいるのではなかろうか。

実は、これらのことは、本号のテーマを考えている間中、私の中の葛藤として繰り返されていた。それでも私は、スタッフを集めて「11号のテーマは、〈アフター・スクール〉で行こう！」と告げた。ぜひ、本誌の表紙を開いてみた読者の皆さんには、最初から最後まで目を通していただき、最後のページの直前あたりで、にんまりと「なるほどね」と踏ん切りの理由に納得いただければ幸甚だ。

未来への大人の責任

これまでも、私たちの「てら子屋」の実践や発信は、〈子ども〉と〈学び〉の〈未来〉を主題としてきた。近未来社会に求められる教育のあり方を、社会全体で創造していきたいという想いを持って続けてきた。

ヒューマンルネッサンス研究所は、オムロングループの未来社会研究を担っているが、オムロンの経営理念のひとつには「ソーシャルニーズの創造」と唱われている。初めて、この言葉を目にした方々の中には、「ニーズは創造するものではなく、発掘や探索するものだろう」と指摘いただくことも少なくない。

それに対して、私はいつもこう答えている。「誰にも正確な未来予測はできません。だから、なるべく確度を高く、目指すべき豊かな未来を〈創造する〉という態度が必要です。さらに、その未来社会や生活の中で、人々が何を必要とするのか、それは分析だけではなく、〈想像する〉ことから生まれます。その結果が、どのくらい周囲のシンパシーを得られ、未来へ向かう波とシンクロできるかが勝負どころです。そのために、あえて〈ニーズの創造〉という言葉を使うのは、とてもチャレンジングな経営理念でしょう？」と。

だから、本号の「てら子屋」も、豊かな未来社会に向かうために、その兆しを見渡しながらシ

ンパシーを盛り上げ、皆さんとシンクロしたいと願っている。

私たちは、このパラダイム・シフトの向こう側に展開されるであろう社会を〈自律社会〉と名づけている。〈自律〉した人間による、〈自律〉した社会である。その〈自律〉とは、〈自立とつながり〉、〈試行錯誤と寛容〉、〈自由と責任〉、〈科学技術と自然〉、〈夢と挑戦〉、このような要件がバランスを整えた先に成立すると、私は想像している。

もし、そういう社会を目指すことに、私たち大人社会がシンクロできるとしたら、子どもたちにいかなる学びの場を用意すれば良いだろう。いかなる力を身につけて、企業や社会に入ってきてもらえば良いだろう。

目の前のテストのスコアも大切な学力の物差しかもしれないが、それは学校の授業を中心に改善してもらおう。しかし、子どもの学びを、すべて学校に押しつけてしまっては、大人社会の責任放棄と言ってもおかしくない。家庭、地域、そして企業であっても、社会の資源たる子どもの成長を支えることは、大きな責任と言えるはずだ。

現場に見える未来の兆し

すでに、そのような兆しは生まれ始めている。日本の近代学校の発祥の地であり、教育の先端を走り続けている都市として、前号でも紹介した京都市では、「次なる世代の育成、人づくり」を掲げ、教育委員会、財界、学界の3者が共に教育のあり方を話し合う「京都教育懇話会」が昨年5月に発足した。そして、学校内の学びにとどまることなく、学校の外にも学びのフロンティアを拓くためのムーブメントを起こし始めている。

この学校外の学びこそ、「アフター・スクール」の学びなのだ。冒頭の「てら子屋オピニオン」に寄稿いただいた高橋勝先生は、「教える空間」から「育ち合う空間」への場面展開の重要性を説き、「アフター・スクール」の時空間が、子どもの自己形成にいかに重要な価値を持つかについて指摘していただいた。

さらに、本号では「アフター・スクール」の事例研究を精力的に行った。NPOが放課後のプログラムを実施する事例もあれば、放課後の子どもたちの生活をビジネスとして引き受ける企業もある。学校が休みの日の学びの場を、市民がボランティアとして引き受けている事例では、それを円滑に進めるための行政支援のあり方にも注目した。また、企業の社会的責任や社会貢献活動の一環として、自社の科学館から活動を展開する事例もある。

そして、「そもそも、放課後って楽しい時空間だったよね」という原点を見直し、大人が計画するプログラムや学びから子どもたちを解き放ち、暮らしのまちの中で遊べる時空間を持とうとした事例など、未来の「アフター・スクール」を考える上で、興味深い事例を掲載できたのではないかと自負している。

このような事例研究にアドバイスをいただいたのが、財団法人児童健全育成推進財団の阿南健太郎氏である。阿南氏は、児童館や子どもの育成プログラム情報のセンター的な役割を持つ組織において、未来志向と高い問題意識を持って取り組んでいる。本誌では、〈エンパワーメント〉という観点から、「アフター・スクール」の全貌を俯瞰していただいた。

また、HRIのアメリカでのプ

ロジェクトの機会を利用し、カリフォルニアにおける「アフター・スクール」プログラムの現場に出かけた。学校を活動の場としているNPOや、さまざまな特徴を持つ科学館を訪問し、プログラムの現場に立ち、子どもたちと直接やりとりをしているエデュケーターたちとのディスカッションの機会を得て、素晴らしい実践や施設の工夫やノウハウを知ることができた。

そこで私の印象に残ったのは、アメリカの多様性に対する寛容であり、単に「放課後」という意味を超えて、学校を終えた先のキャリアという意味でも「アフター・スクール」というプログラムが機能していることであった。

学びの未来可能性

これらの「アフター・スクール」事例の原稿をあらためて読み直したとき、これまで続けてきた「てら子屋ワークショップ」の試行錯誤の積み重ねも、「アフター・スクール」のプログラムとして、未来可能性を蓄えたものに進化を遂げてきていると感じることができた。

もちろん、不足や課題を探せば、容易に見つけることができるだろう。しかし、学校の外側の時空間だからこそ可能となる、学校の先生と生徒の関係ではないからこそ可能となる学びの価値と、その源泉を確認することができた。

『てら子屋』9号にオピニオンを寄せていただいた佐伯胖先生は、著書『「学ぶ」ということの意味』(岩波書店)の冒頭部で、学習と学びの違いに言及されている。〈学ぶ〉とは、本人が主体的に自分から学ぼうという意志を持って何らかの活動をすることであり、〈学ぶ〉ことは、学び手にとって何らかの意味で〈よくなる〉ことが意図されているようだと述べられている。

やはり、「アフター・スクール」という時空間は〈学び〉の場にふさわしいようだ。そして、未来可能性を感じさせる営みだ。

豊かな子どもの学びの場

最後に、これまで当たり前のように論じてきた日本やアメリカの「アフター・スクール」に対して、中米の国ホンジュラスから古川宗明氏が写真とともに送ってくれた報告に感謝したい。楽天的な彼からは、これまでも家族の写真が添付された近況報告のメールが時々届いていた。いつも、とても幸せそうな感じが伝わってくる。そして、本号のために彼が撮影して送ってきてくれた「アフター・スクール」の子どもたちの写真も、皆明るくて、前向きで、希望を感じられるものばかりだった。

なぜだろう。ホンジュラスの子どもたちは、誰もが学校に通って学べるというわけではないようだ。そして、放課後は家族の仕事の手伝いをする子どもたちも少なくない。遊ぶ道具に恵まれているわけでもない。しかし、彼らは幸せそうだ。少なくとも成長しようとしている姿勢が感じられる。

なぜだろう。私は、彼から送られてきたすべての写真を並べてあらためて眺めた。気がついたことがひとつあった。彼らが持っているものは、仲間であり、家族であり、近所の人々なのだ。彼らの「アフター・スクール」は、孤独な時空間ではなく、気持ちよく社会につながることのできる、豊かな時空間だったのだ。「アフター・スクール」の価値を、ズバリ見せてもらった。